

岩手県大槌町における記憶再生プロジェクトの試み ～大槌町の風景再生に向けた文化資源調査 その2～

東日本大震災
まちづくり

被災地
記憶

復興
文化資源

1. 背景

未曾有の大震災は、多くの命とともに人々の日常生活の場であるまちも、一瞬で奪い去った。津波と火災により、大槌町内全家屋の59.6%¹⁾が被災し、大部分が更地と化した。この失われたまちは、もはや住民の記憶としてしか残っていない。震災前の生活風景を反映したまちに復興するのならば、その手段は、この残された住民の記憶を活かすことに他ならない。また、震災後、初めて被災地に関する専門家や研究者にとっても、震災前のまちの生活風景を、住民と共有することの意義は大きい。

本研究は、住民の記憶が唯一の情報とも言える状況において、震災前の生活風景を再生する復興まちづくりに向けた、新たなまちづくりの手法を試みたものである。

2. 記憶再生プロジェクトの概要（目的と手法）

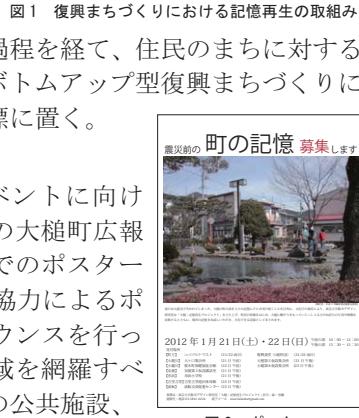
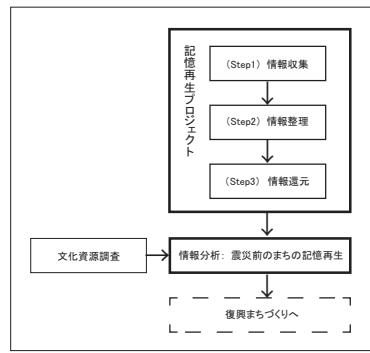
記憶再生プロジェクトは、震災前のまちの記憶再生に向けた初動プロジェクトとして位置づけられる。手順は図1に示す通り、大きく3つの工程にわけることができる。（Step1）写真や映像等の記憶情報を収集するイベント開催（Step2）情報の整理・活用・追加のためのデータベース化（Step3）記憶情報の地域還元

最後に、これら工程を踏まえ、記憶情報を分析する。

また、本プロジェクトと並行し、大槌町の歴史や文化、景観、都市形成に至る文化資源調査を進めており、既に住民に忘れられたまちの記憶であっても、地域資源となり得るものに対し、価値付けする視点を持った。これら住民との双方向の対話により、震災前のまちの記憶を再生する過程を経て、住民のまちに対する意識を促し、住民主体のボトムアップ型復興まちづくりに繋げていくことを最終目標に置く。

2.1 情報収集（Step1）

昨年12月から収集イベントに向けた準備を始め、本年1月の大槌町広報掲載、市内主要商業施設でのポスター告知（図2）、自治会長の協力によるポスティング等の事前アナウンスを行った。受付会場は、町内全域を網羅すべく、被災の少ない住宅地の公共施設、



正会員○森 朋子* 同 黒瀬 武史**
同 窪田 亜矢*** 同 岡村 祐****
同 田中 晓子*****

仮設住宅の集会所、町内中心部の主要商業施設の合計10カ所とした。東京からは、東京大学都市デザイン研究室を中心に総勢19名が参加し、4つの班に分かれ、1月21・22日の2日間で10会場をまわり、記憶情報収集イベントを開催した。

提供情報は、①写真、②映像、③お話し（ヒアリング）の3つを想定し、①スキャナーで読み込み即時返却、②1週間程度借用しダビング後返送、③場所についての記憶情報の記録、を行うこととした。各情報については、情報場所、情報時期（撮影時期）、情報内容とその記憶内容を記録した。特に写真情報については、大判の地図を用い、詳細位置も記録した（図3）。また、地図を見て、まちの記憶を話し出される場面も見られ、ヒアリングから多くの情報を得ることができた。

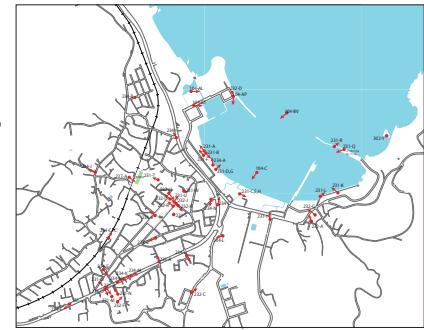
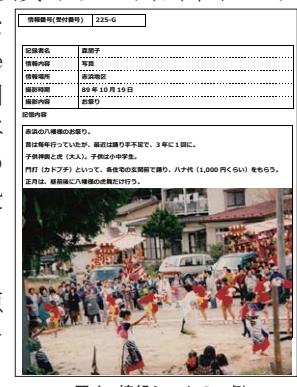


写真1 イベント開催当日の様子

2.2 情報整理（Step2）

情報提供者を会場ごとに番号で整理し、同じ情報提供者から得た複数の記憶をアルファベットで整理した（例：103-Bは、100番台の会場、3番目の情報提供者、2番目の記憶）。次に、筆記による記録から、Microsoft Wordによりデジタル化した情報シート（図4）を作成した。これをベースに、扱いの容易さと出力形態の多様さを重視して、データベースソフトFilemakerPro11を用いてデータベース化した。情報場所は、概ね地区を単位（安渡地区・赤浜地区など、但し町方地区は上町・須賀町など町名単位）とする整理を行うとともに、正確な場所がわかるものは、Google Mapをベースマップとした地図に表示した。また、風景やイベント写真といった写真内容での整理も行い、場所と内容の2段階で検索できるようにした。尚、データベース化にあたっては、岡村（2010）²⁾による地域資源インベントリー作成の方法論を参考にした。



MORI Tomoko, KUROSE Takefumi
KUBOTA Aya, OKAMURA Yu
TANAKA Akiko

2.3 情報還元 (Step3)

Step1で収集した情報を、情報提供者や開催関係者に還元することを目的に、日常生活の身近な存在となるよう「大槌アルバム」と称するカレンダーを作成することになった。月毎に変わるカレンダーの特性上、まちの記憶に対する意識の継続性も目論み、12ヶ月分を地区別・テーマ別に編集した。また、各写真には、記憶と位置情報をつけ、コミュニケーションを促すことも意識した。これは、現地に赴いた学部生と、現地の復興支援組織³⁾の担当者との真摯な対話から出来上がった点を付記しておく。

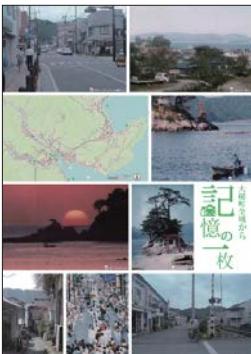


図5 大槌アルバムの一例 (A3サイズ、裏面)

写真2 大槌アルバムの一例 (表面折込)

3. 情報分析

Step1～Step3を踏まえ、1,000以上の情報が集積したデータベースを使った地区別の分析、データベースのキーワード検索機能を使った特定地点や行為の分析と、震災前の定点観測による分析を行った。

3.1 地区別による分析

データベースより、安渡地区や赤浜地区など地区単位の情報を引き出し、地区別の記憶情報を分析した。学校帰りの子供の遊び場、日常生活での買い物習慣、コミュニティの単位や領域、小学校や公民館での行事、神社を中心に繰り広げられるお祭りの光景、その地区特有の風物詩等、1年を通した生活風景が浮き彫りになった。また、歴史を遡った昔の情報も寄せられ、埋めたて以前の海と一体となった生活風景も、窺い知ることができた。

3.2 キーワードによる分析

データベースのキーワード検索機能を使い、ある場所やまちのイベント等の特定情報を引き出すことができる。これを使い、特定地点や祭り等の情報を分析する。一例として、町方に多く見られる「湧水」をキーワードとしてデータを引き出すと、庭先に見られた水船の様子や、湧水を汲む日常風景、昭和初期の大槌小学校校庭に湧水池があつたという歴史を遡る記憶情報など、大槌町民と湧水の日常生活における関係が垣間見れた。



写真3 「湧水」をキーワードに検索される写真の一例

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程

** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 助教

*** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授・博士（工学）

**** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光学科学城 助教・博士（工学）

***** 後藤・安田記念東京都市研究所 研究員・博士（工学）

3.3 定点観測による分析

同一地点における震災前後の写真を比較し、分析を行った。被災状況の把握はもとより、被災前のまちなみ景観、公共空間の設えや色彩等の詳細情報を得ることができ、示唆に富む分析となることが分かった。しかし、この分析には、現地を熟知した人の助けが必要となることや、被災前のビジュアル情報が残された場所に限定される等、課題も明らかになった。

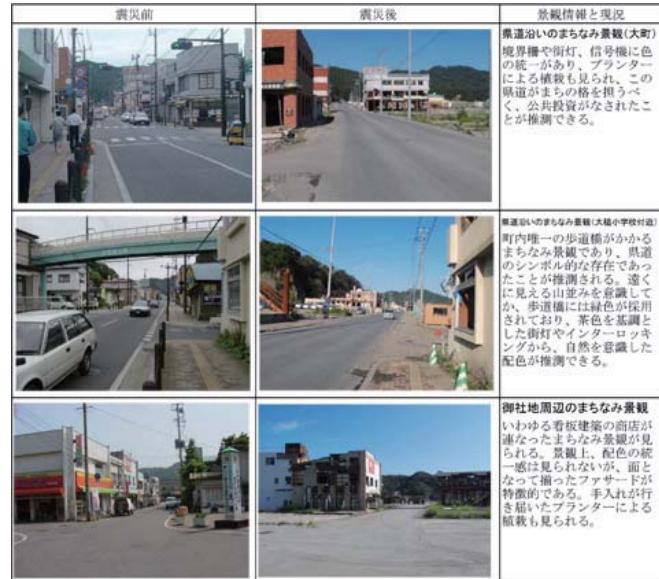


図6 定点観測分析の一例

4. まとめ

1月21・22日の情報収集イベントでは、写真約600枚、映像3本、資料や本13冊と多数のヒアリング情報を得られた。大槌アルバムの評判もよく、連絡先である研究室や復興支援組織³⁾への問い合わせが後を絶たない。しかし、今後も記憶情報収集から、整理、還元、分析というサイクルをいかに持続させられるかという点や、何を復元あるいは復興する、しない、という議論へ発展させられるかは、住民のまちに対する意識を問う一般的なまちづくりでの課題に通じるものであり、本来的なまちづくりの課題が内在した復興まちづくりの難しさも、明らかになってきた。

本プロジェクトの大槌拠点として、復興支援組織³⁾が引き続きまちの記憶情報を収集することになった。失われたまちの記憶を手がかりに、住民主体のボトムアップ型復興まちづくりに向けた初動プロジェクトとして、一定の成果が出たと言える。しかし、記憶情報の分析を具体的にどう復興まちづくりへ活かすかは、今後の課題である。

【謝辞】

本プロジェクトは、文化庁の地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業で行われた。1月21・22日の情報収集イベントでは、大槌町内外から61名の参加を頂いた。開催にあたっては、大槌町役場をはじめ、多くの方々の協力を頂いた。その他、イベント前後にも写真提供の協力を頂いた。最後に、我々の主旨を理解し本プロジェクトを引き継いで頂く、一般社団法人おらが大槌夢広場の復興館長高田様には、心から謝意を表す。

【注釈・出典】

1) 大槌町総務部税務会計課資料 (2011年9月28日現在)

2) 岡村祐「地域資源インベントリー作成の方法論構築に向けて~茅ヶ崎市及び垂崎市における取り組みに基づいて~」、観光科学研究、第3号、2010.3、p.71-77

3) 一般社団法人おらが大槌夢広場

4) 図2,4の写真、写真2および図5内「大槌アルバム」使用写真、写真3 個人提供

5) 図6の写真 株式会社邑計画事務所提供

*Doctor Course, Dept. of Urban Eng., School of Eng., Univ. of Tokyo

**Assist. Prof., Dept. of Urban Eng., School of Eng., Univ. of Tokyo

***Assoc. Prof., Dept. of Urban Eng., School of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

****Assist. Prof., Dept. of Tourism Science., Tokyo Metropolitan Univ, Dr. Eng.

*****Researcher, The Tokyo Institute for Municipal Research, Dr. Eng.